

外国人労働者、初の100万人

昨年、留学生などが増加

日本で働く外国人の数が、2016年に4年連続で増え、初めて100万人を超えたことが分かった。アジアを中心に技能実習制度（3面きょうの）を通じて人材や

を重視している。外国を近く公表する。外国人労働者は高度人

材や技能実習生、働いて

いる留学生、永住者や日

本人の配偶者などに分類

される。15年10月末時点

の留学生は8割増加。技

では90万8千人で、1年間で10万人程度増えたことになる。日本で雇用される人の2%弱が外国人となり、次第に存在感を増しつつある。

国別では中国やベトナムなどアジア諸国が多くを占める。分類別で増えているのは留学生や技能実習生、高度人材だ。15年10月末までの3年間で

は全体の2割近くを占める留学生は8割増加。技

能実習生も3割増えている。研究や医療など高度人材も3割超伸びており、全体の増加をけん

引している。昨年もこの傾向が続いたもようだ。

外国人材は他の国・地域との獲得競争が激しくなっている。韓国では15年5月時点で93・8万人、台湾では15年末時点で約59万人の外国人が働いている。人口との対比では日本よりも受け入れが進

んでいる。政府は外国人労働者の特定して、相手国と2国間で協定を結ぶ新しい受け入れの枠組みなどについて、働き方改革実現会議で議論する見通しだ。